

『劔岳 点の記』 追っかけ奮闘記(中編その2)

牧野美知子

(国立富山高専英語非常勤講師)

先日、6月初めの新聞に、木村監督が、映画製作者の功績を讃える「藤本賞」を受賞し表彰されている記事が写真と共に載った。「今まで多くの賞をもらったが、映画作りを評価する今回の賞が一番嬉しい」との監督のあいさつ。実際、『劔岳 点の記』はアカデミー賞6冠初め、この1年でいくつの賞を授賞されたのだろうか。キネマ旬報監督賞、ブルーリボン賞作品賞・新人賞、毎日映画コンクール日本映画優秀賞……、そして旭日小綬賞まで……！

正しく知るために監督に電話でお聞きすると、「25だよ。いろんな県などのもあるから」というのでびっくり。そういえば富山県文化功労賞、北日本新聞特別文化功労賞とか……。でも、この映画のために監督がやった仕事を思えば何を授賞されてもおかしくない。

さて、落石事故という1つの試練を乗り越え、2008年7月1日、浮田家での2度目の撮影がさわやかな梅雨の晴れ間に行われた。監督は12キロ痩せて、地獄から抜け出したような疲れた様子だったが、撮影中は相変わらずの厳しい怒声が聞こえてきた。



浮田家でロケ再開 やつれた監督と '08. 7. 1

毎日通った浮田家の庭で、撮影待ちの香川照之さんから、長次郎のせりふの富山弁アクセントを聞かれたが、富山の原住民でない私は確信もって答えられなかった。また浅野さんに、「ライトレールに乗ると20分で海へ行けます」と言う、オフタイムになった日に、一人で岩瀬の海に行ったことが彼のブログに写真入りで出て

いた。

再開後のスタッフは安全重視で人数も縮小されたが、劔岳登頂というクライマックスを控えていた。私の手元にもスケジュール表は届かず、山での動向は浅野さんのブログで知るばかりだったが、7月17日2度目の挑戦でついに登頂、撮影を果たしたことが、ブログで、香川さんと山頂で抱き合う感動のスナップからわかった。二人とも凄い髭面、明治の測量隊の感動そのものだっただろう。

7月24日、立山駅付近で山岳ボランティアの活動に出ていた追っかけの友が、たまたま下の常願寺河川敷に撮影隊を見つけた。電話を受けた私は富山市の自宅から35分で立山駅へ駆けつけた。まさにその日が全撮影の終了日だったのだ。「終了！」という感動の叫びをともに聞き、胴上げを見ることが出来たのは、神様が2年間追っかけた私たちの熱い気持ちに報いてくれたのだ、と感謝した。

撮影が無事終わって安堵したものの、東京へ帰ったロケ隊が二度と富山へ来ないと思うと淋しかった。が、監督は9月、大和のグランドプラザでのトークショーから始まり、雄山高校やファボーレなど年内に4回も講演で来県し、私はすべて駆けつけた。監督の講演は実に面白く、感動的だった。どの講演もトピックは共通するところがあるがそれなりに違って飽きることはない。爆笑の中で居眠りどころではないし、あくびなどしようものなら鋭いカメラ・アイで発見され、「あくび、これで3回目だね」「どうして面白そうな顔をしていないんだ？」と突っ込まれ冷や汗ものだ。

けれど、マイク不要のその話術、次々と尽きることなく溢れ出る話題の裏に、大勢のスタッフを引き連れて、あの奇跡的な撮影をやり遂げた人の、偉大な力が見え隠れする。何を話しても、あの偉業を成し遂げた人なんだ、という価値観が沸き起こる。すっかり彼の講演にはまってしまった。その頃、TVの『情熱大陸』、雑誌「キネマ旬報」などでも木村監督の類まれな映画人生が取り上げられ連載された。

2008年大晦日、我が家の電話が鳴り、声の主は木村監督だった。元旦の真夜中、ファボーレでやる非公式の試写会への招待だった。ついに映画は完成し、監督の声はこの上なくはずんでいた！

(続く)

香川照之讃

宇治長次郎から岩崎弥太郎へ

山下 富雄

「劔岳 点の記」を私は何度みたことだろうか。劇場で二度見て、なお、DVDを買ってまた何度か見た。その都度、私は、自らの迂闊さを思い知らされたのである。見る度に新しい発見に出会ったとでも言えばそういうことにもなるだろうが、見落としていたものの多さに気づいては首を傾げていたからである。

季節と気候と時刻の三点が交わる交点の確率などという愚かな考えをめぐらすまでもなく、これは映画の企画そのものが「狂気の沙汰」と言うべきであろう。まして相手が「劔岳」とくればなおのことである。

しかし、それ程の多様な魅力に浸りながら、繰り返しこの映画を見て、最後に集約されるように鮮明に浮かび上がってくる映像は何かと問いかけてみると、それは、不思議なことに、画面の背後にそびえ立つ「劔岳」の美しく険しい姿でもない。劔岳の頂点に立って黙する柴崎芳太郎でもない。手旗信号を送って成功を讃える小島烏水たちでもない。

敢えて、「点の記」の一つ一つの映像を消して消し去るという作業を重ねてなお残る映像はというと、黙々とただ歩く、宇治長次郎の歩みなのである。二度、三度と映画を見ていくと、私は、宇治長次郎を「描く」香川照之の歩みが、この映画の多くを語っているとさえ思うようになった。

それは、「能」のすり足のように、身体の上下運動を極力押さえ、たんぼ道や山中の枯れ草に平行して、或いは山の斜面に沿うように、ひたひたと進む長次郎の歩みなのだ。熟達した案内人のそれであると同時に、この歩みは、宇治長次郎という人そのものを、確かに表現している。

私は、そこに香川照之という役者の発する不思議な力を感じないわけにはいかない。香川には「主役を食う演技」などという言葉が賞賛の意味で用いられることがあるが、私は、そうは思わない。宇治長次郎というその人を、香川は、

過不足なく、しかも、所を得て描いているだけなのである。

富山県人である私は、やはり、「富山県人」を映画の中に見ようとしていたのかも知れないが、香川によって描かれた長次郎は、「好ましい」富山県人の典型と思えてならなかった。

香川照之の発する不思議な魅力に取り憑かれていた私は、今度は、收拾のつかない混乱を経験することになった。

NHKの大河ドラマ「龍馬伝」の岩崎弥太郎を目にしたとき、私は、思考回路の修正に時間の必要なことを感じながら、しかし、次の瞬間には、大きな喝采を送っていた。

宇治長次郎を演じたはずの香川が岩崎弥太郎を演ずると、型破りの破天荒な人物を画面に踊らせていたからである。

整わぬ髪のと、白髪と見まごうような埃を頂いたまま、汚れた顔の中にあの黒い「紋様」をこびりつかせた歯をのぞかせる唇は、何かを語ろうとする言葉を残して、今度は、貧困から這い上がろうとする、若き日の岩崎弥太郎を描いていた。丁度、あの巧みな「すり足」で長次郎を表現したようにである。

役者の変幻自在は幾度も見てきたと思うのだが、香川照之の場合には、その範疇にも入れがたい。例えば、香川の演ずるNHKのスペシャルドラマ「坂の上の雲」。このドラマの正岡子規もまた、正岡子規なのである。子規の子規である所以は、かくかくと思わせる不思議な描写力が、香川にはある。

香川照之が演じた、長次郎から弥太郎のもたらした混乱をそのままにして、この役者のとらえどころのない大きさに、私は、これからも混乱を大きくしていかなければならないのだろうか。

プロフィール

前射水市教育長・元水墨美術館／近代美術館館長

元高岡高校長・元砺波高校長・元福岡高校長
現在富山高校国語非常勤講師

道を聞かれて

松本美保子

近所のスーパーに行く途中のことだ。横断歩道の向かいで、年配の女性と紺色の制帽制服の男性が話をしている。一見すれば女性が彼に何かたずねているようだった。

信号を渡り、二人のそばを通り過ぎようとしたときだった。「あの、すみません」と、男性が私を呼び止めた。足を止めると、彼は女性に礼を言った。女性は笑顔で去っていった。

たずねていたのは男性の方だった。年は六十歳前後で、バスの運転手さんのようだ。あらためて私に向き直り、彼は言った。「お急ぎのところをすみません、あの、バス停ってどこですか」

私はよく道を聞かれる。

郊外の住宅地にいるおかげか、この数年は少なくなった。それでも月に一度はだれかに道を聞かれる。断っておくけれど、私はそれほど人の目をひくような容姿ではない。若いころは童顔のお姉さんで、今や普通のおばさんだ。

知っている道ならともかく、出先や旅先や引っ越し間もない所でも容赦ない。街なかではそこにキャッチ系や宗教系が加わる。ほかにいくらでも人がいるのに、駅の改札や地下道で、なぜかまっすぐ私の方へやってくる。

夫によると、カモネギよろしくぶらぶら歩いているからだと言う。たしかに、夫は早足なのか一緒にいるとだれも寄ってこない。けれどもうっかりはぐれたら、あっという間だ。目の前に若いキャッチ系美人が笑顔で立っていたりする。

でもそのほとんどは本当に困っている人なのだ。ほおっておけず、初めての場所でもなるべくわかることを答えるようにしている。

スーパーを探す軽トラに乗った年配の御夫婦、雑誌に載ったというラーメン屋を探している男女の若者四人、隠れ家的ケーキ屋を探す親子らしい女性の二人連れ、息子夫婦をたずねた帰りに駅を探している初老のご婦人。電車で隣り合わせになり駅名を確かめにきたのは、日本に単身赴任した夫の元へやってきた異国の女性だったし、秋葉原駅の構内で総武線どこかと聞いてきたのは韓国系の若いカップルだった。

わずらわしいと思う時期もあった。けれど、

そんな料理店があったのとか、そんなものが話題になってるのとか、ほんの一言二言の出会いで世間の風を感じられると気づいてからは、どちらかというとなじむようにしている。

けれどそのときばかりはさすがにうろたえた。「いや、こっちの路線に今日から配属されたんですが、バス停がわからなくて…」

頭をかきながら彼はつづけた。制帽の下額のには、うっすら汗がにじんでいる。

「…なんていうバス停なんですか？」

「K 駅のなんですがね。駅前にあるって聞いたんですが…」

それを聞き、ははあと思った。JR の K 駅の改札はホームの上にある。南出口は高架で大手スーパーの建物の二階へつながっている。高架の下はロータリーで、左手はタクシーの、右手はバス乗り場になっていた。ところが高架の右には常緑樹の大木がずらりと茂り、バスが見えにくい。引っ越ししてしばらく、私も夫もバス乗り場があることに気づかなかったぐらいだ。案の定、迷える運転手さんは JR で来たという。「K 駅のすぐ前にあるから、戻られたら分かると思いますよ」と、私は彼の後ろを指さした。

ところが、運転手さんは礼を言うどころか、ますます納得がいかないという顔つきになった。来た方をこわごわふり返るのを見てみると、ほおっておけばそのままずっとバス停を探して、さ迷い続けてしまう気がした。どうせスーパーへ行くついでだ。私は案内を申し出た。

道すがら、いや面目ないですと彼は何度も頭をさげ、今までずっと JR 線の北側の旧街道を走っていたこと、今度南の住宅地にできる路線に乗ることになったこと、今日はその下見に来たことなどを話してくれた。うつむきかげんにぼつぼつと話すようすは、気の毒なほどだった。

やがてスーパーの大きな建物を回りこむと視界が開けた。ホームや駅舎、タクシーのロータリー、それに高架とその向こうの大木も見える。私とその青々とした茂みをさし、あの向こうですよと言った折りも折り、木陰からバスが姿をあらわした。その瞬間、運転手さんの顔が初めてほころんだ。

「そこだったのか！ いや、ありがとう！」

帽子に手をやるがはやいか、彼は太急ぎできびすをかえた。去っていく紺色の制帽姿に、どういたしまして、と私はつぶやきかけた。

(了)

「臍曲がり」が考える 効率化の行き着く先

無駄を省く。

効率化を追求する。

反論する必要の無い、理に合った言葉である。

事実このコンセプトで我々は、相応に生活のレベルを上げ続けることが出来た。

「社会性を持った効率化」の時代、であったと言える。

ところがである、最近の世相を見ていると臍曲がりの私には、そんな具合のいい理解は、飛び越えてしまったように見える。

効率化の方向が、人間の根幹を揺るがすほどの「経費の削減追求」に映るからである。徹底した経費削減の方向感覚は、様々な形に紆余し、曲折するだろうが、最終的には人件費をターゲットにする。

それはよいのだが、その質が「人の不要化」に繋がり、遂には、特定階層以外の人間を必要としない社会の形成に至ってしまう、……そんな危惧感すら持つ。

あらゆる階層の人の立場に立脚出来たかつて効率化が、特定階層以外の人は不要だとする、「特異な効率化」に進化（変化）して来たのだと思うが、……果たしてこれが進化か？

世界を目指そうとする日本の一流企業は、世界戦略の構築と称し「徹底した経費の削減」を図る。

確かに企業としては理に合った行為であり、誰も責める事は出来ないし、非難される筋合いは何も無い。

不思議な光景は、不況から脱出せねばという目的で、政府自らが政策として、これからの企業の後押しをすることである。

国民のための政治とか、国民の目線に立った政治とか、「国民、国民」と言いながら政府自らが「人間不要の社会形成」のお手伝いをしていると、言われても仕方がない。

これではよしんば景気が回復したとしても、「術無き者」は救われない。

年収200万円の価値の人の職場は、既に機械

(コンピューター) に取って代わられている。

今後更なる技術の進歩を取り込み、年収300万円集団を不要とし、400万円集団を不要にして行くに違いない。相当高度な熟達者と言えども、失業の恐れが出始めている。

それ以上に危惧するのは、新卒者の就職問題である。

かつて「金の卵」と持て囃された時代の若者を吸収した職場は、とっくの昔に全てが機械に置き換えられている。

就職先が決まらないのは、本当に不景気の原因か、景気が回復すれば問題が解決するのか……とてもそう思えない、何か不気味な階段に既に突入しているのではなからうか。

国は、こうも宣う。皆さんも新しい職場に適応出来るよう、様々に学習し勉強して下さい、……それなりの技能を積極的に習得してください、……我々がその後押しを致しますから、……と。

冗談言っちゃあいけない。

国民の大多数は先祖代々、「言われた事を、真面目に、コツコツと成し遂げる」を、得意として来た達人ばかりなのだ。

ここに来てにわかには勉強しろなどと言われたからといって、高い能力が求められる職場に就けるまでのレベルに、自分の技量をアップ出来る人が一体何人いるというのか。

「2・6・2 (にいろくに) の法則」なるを、聞いたことがある。

一定の人間集団には優秀な者が「2割」、ダメな、者が「2割」そして残りの「6割」は訓練次第で良くも悪くもなる達人、……そんな振分が形成されるのだと言う。

ダメな2割組は、当然弾き出される。すると今度は、残った2割と6割の8割で、新たに「10」を形作る。

するとまた、「2・6・2」の法則が生まれるのだと言う。ここでもまた、ダメな2割組が弾き出される。

こんな繰り返しで結局は一人も居なくなってしまう、……が、^{あなが}強ち笑い話とも思えない気がする。

「不要の烙印を押された人達」は、一体何をしたらいいのだろうか。そう、お上(国)に「お恵みを、お恵みを」と、大合唱するしかない。

この「お恵みなる代物」、最近では「手・当」と言うらしい。子供に向かい、「国のお手当てが少ないから、お前は旨く育たないのだよ」とかなんか言い出して、やがて子育ては国が為すものだに変わるかも知れない。

こんな社会はウンザリだとばかりに、悪事に走り出す者が多数出現するかも知れない。

暴徒化せざるを得なくなった個人や集団が、あちこちに生まれるかも知れない。

勝利者の皆様、人件費の削減を目指して、
どんどん「2・6・2」の法則を実行して
下さいまし。

そして政府様、後押しをどんどん続けて下さいまし。

我々こそが勝組だと、^え選りすぐりの勝利者
で祝宴をあげて下さいまし。

『それにしても今一つ盛り上がらないよ
うな、この祝宴……』

『誰か、我々の勝利を祝福してくれませ
んか、……』

『誰か、よくやったと我々に拍手をして
くれませんか、……』

エエ、みんな何処に消えちゃったの、誰
もいないの、……』

選りすぐりの勝利者さえも、『鬱病になる』^と瞬
間^きが来る。

我々は本当にこんな社会の形成を、目指して
来たのだろうか。

凡句楽

